

文化文政度の小説家

菅正村稿



本間文庫
文庫 14
A122



文庫14
A122



文化文政度の小説家

史海系物
二巻二分



64

○文化文政度の小説家

郷土庭管村

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

明和安永のぶろ行けんし赤本一変して黄表紙の洒落とあり狂歌と共に天明年間のはるの風人は多難して其才を盡す。寧ろ拙きてまゝ一変して歌討の続き話とあり。大に発達してつひに(文)子となりて六冊三十巻の草紙紙とあり。柳画形摺製本とあり。作者まゝ新奇的考案とあり。世人の好に應じし年々初春の新刊数十種に及ぶ。其用はて共に出つゝ。此において京傳馬琴三馬二九種が出現す。

安永(天明寛政より)中卒(俗に葛藤本といふ)其の本の形(葛藤本の形)葛藤本に似たり。後此し一変して安永流の人情本とあり。行けん事り極廓の地む

多田仙舟の『^{多田仙舟の}』
きと綴り、^{多田仙舟の} 刊行、一冊、三冊、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

随つて表表紙草双紙と刊行の^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

それをも止む、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

馬の浮世風を^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

出し、草双紙、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

く草双紙、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

さんば文化文政の^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

入後、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

枝と摺りして、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

考、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

之に、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

（寛政の文化十三巻に世を考へ、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

字先づ其中の大文明と放つ、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

吾家とやら、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

世、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

作の批評も、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

と大づみに、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

先づ、^{寛政二年}、公儀より御
行りて、此類の書と出すを許さず、^{寛政二年}、公儀より御

カ一 五家の年配先後及び居所

カ二 著作の種類

カ三 著書言及の著作料

カ四 世計のこと

カ五 世人の待遇

カ六 五家の学問識見

五家相互の交際

五家相互の交際

カ七 画工との関係
カ八 政令との関係

五家たぶに一短一長有り。その時子大に行ければ、
よりしんばなるを、
造る異聞。若作の

世の歴史

カ一 五家の多岐先後及び其所

一人先子出て、
りて作の易し。一人先子す、
それ子孫して、
く士輩に功名手柄、
ありんば先代の考にかゝる事、

小夜家にて

十日

由平馬琴をこれに下。十返舎一九八年の上、
先子母の世を、
と長壽、
とあり。大命とあり、
は、騷逸軽快の奇才子三馬も、

上立傳

馬琴	寛政十一年に生れ、 文化十三年に死す	享年五十六歳
一九	明和四年に生れ、 嘉永二年に死す	享年八十二歳
三馬	天明二年に生れ、 天保二年に死す	享年六十七歳
種彦	安永五年に生れ、 文政五年に死す	享年四十七歳
	天明三年に生れ、 天保十三年に死す	享年六十歳

常傳の初作、天明、馬琴の寛政、
三馬の享和二年、三馬の享和、
下、
麻栗名ハ享和二年、三馬ハ享和、

69

くきんをいふ、狂歌を誦し終て器用書き酒、飲みて人相よき

より書肆に題取きて、滑稽をす、(皆良書を借り) 丙子 隆慶元年

の一流也。此書よく行けり。 ~~此の~~ 隆慶中記せ書一は

自の 三馬の巻表紙に伏た平比のちり。草双紙にして多量は

抄の多く、教付あがり、おけたまふ、(一)のころ、信美、淫紙の

種々の休書きたる、いふ、いふの世とある、男女、落書に、いふ、いふ、

けり。いふ、いふ、有の強き物の、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

うにせう、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

笑人の、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

筆端一行の、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

天粟の書才として、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

山間ししと、草落書を、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

右陰読を、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

此人別才なりと稱せ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

吉原文を、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

毛那と名を、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

糸三、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

葵豆の書目、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

阿部の、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

隆慶、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

隆慶、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

隆慶、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

隆慶、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

崑崙山、一冊三十枚前後
 一冊一冊五枚、一冊三枚
 信新しきもの極多
 あり、此位にさし
 さるるもの多し、
 信りかゝる電報、
 十四文づつと料、

使して多く利得あり

世相論(一) 一冊部と平格すも三百五十兩、明法の字

これに八倍と見れば、四百田の値なり、新く旅行と担ぐ者多し

此の作者に国筆として、八全一として出さるり、出さるり

が通葉の作(一) もしも重版次に、馬車人の作者なり

入銀として、全三、五分、二分、筆法に準じて

本町へ出せしなり、本町の利得なり、村元の田舎流しが出さる

~~二冊五、一冊四、五、部づつ、~~

先行して、

先出の、

曲亭の、

也、

必し千四五部、崑崙山

大八、松元

料、作料

所の地本間、葛田重幸

と作し、此時村

名、多分

分あり、其ら

此、これ

本、作者

二、新編

ち、作

後

画工

伴ひて料理に管掌を聞きしのみなり。曲亭の自記に、宮内

馬琴兩人が如く、仕事と稱し、八重治七、八等の次第ありて

といふは、此等の御筆に、此等と書きて、思ふは、此等と書きて、思ふは

此等の御筆に、此等と書きて、思ふは、此等と書きて、思ふは

此等の御筆に、此等と書きて、思ふは、此等と書きて、思ふは

此等の御筆に、此等と書きて、思ふは、此等と書きて、思ふは

此等の御筆に、此等と書きて、思ふは、此等と書きて、思ふは

此等の御筆に、此等と書きて、思ふは、此等と書きて、思ふは

此等の御筆に、此等と書きて、思ふは、此等と書きて、思ふは

此等の御筆に、此等と書きて、思ふは、此等と書きて、思ふは

此等の御筆に、此等と書きて、思ふは、此等と書きて、思ふは

此等の御筆に、此等と書きて、思ふは、此等と書きて、思ふは

此等の御筆に、此等と書きて、思ふは、此等と書きて、思ふは

のれば、老ひて娘と稱して、代筆と云ふ事あり。其の御筆に、

料二十両の御筆に、其の御筆に、料二十両の御筆に、

の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、

此の一部の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、

其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、

其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、

其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、

其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、

其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、

其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、

其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、

其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、

其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、其の御筆に、

老後
 一、あつてもまゝの癖に暮らして居るに似たりし者、
 馬琴、海内所の少少の書師に入習して、
 聲にあがり、
 葉せり、
 宇伯、
 一、あつてもまゝの癖に暮らして居るに似たりし者、
 馬琴、海内所の少少の書師に入習して、
 聲にあがり、
 葉せり、
 宇伯、

一、あつてもまゝの癖に暮らして居るに似たりし者、
 馬琴、海内所の少少の書師に入習して、
 聲にあがり、
 葉せり、
 宇伯、

別行

三馬のまゝに書きたるもの、酒と好み抄舞と好み人と管記一人と馬
 り、依るもの、如く粗葉あるは似たり、
 心本に八解さき我作の共産より世傳計に疎外し、
 全主と仰て本外に大柳の表葉を削き、主傳の如く
 号の表葉の種を初白く作り、又自作のものにて強め
 せり、江戸の水にて洗葉さきより、
 其の
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 一百、

の衣箱料とあり、
 櫻又彫刻の注文を、
 とさへ、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 一百、

(以下次号)

史
海
系
二
候
分
記

○文化文政度の小説家(續)

郷
庭
實
村

井五世人の待遇
及名家相互の交際

戯作者もて小説家と目せしと云ふは是れが一般に俗に輕佻浮薄
 にくく朝間あそびと同らに世人より待遇せらるゝ如くされど安永寛
 政頃ハ老らるる戯作者とハ粹士直人を以て同らに待遇せらるる
 表紙甚多本をもて職役家業者も戯れに何れも酒客やちん
 をもていふかゝの類々を以て同らに稱なづけりし事三二春何ハ自
 作序に戯れして作ると言ふしやうやうそそれよりて戯作者と
 して名を付け作者として芝居狂言の作者にのみさう中に通用せし
 世の中この世の志こころ戯あそび字あざなに區別と云ふ事ありし時好に遠

いし文書多き。作の評判より人と書評のさし
つひに本業をせ。作者名の多き時一紙と信じて書評
の著頭下紙に先生をいけり。此等の際に眼と張る。さ
るべき心は、戯作者たることを望み。文化文政の
進歩に全く賛同と同一感あり。今一紙に書評
も此の無名者、部類にア。つひに、
うけしり。左れば文化文政の小説家、世人の
い思けれど、曲亭、學問見識より、高橋、柳、八、
採田、保、身、身、身、身、身、身、身、身、身、身、身、身、
そき考い。下、採田に出ると、さ、迎い、
はたり。其末の、
りて文に文の此の、

小林 誠を、共に諸君に請ね、
顧問として、
此の、
は、
の、
此の、
り、
け、

の一紙ももて晩年を交証するべしと云々

此間之雨天より少く涼爽相成りて是亦佳候也
若葉も亦佳候者先達てハ此意云々思惟難謝書也

昔々好況 一冊

右返上付るも後年於他可被下ハ右ハ好存より此意ハ
公ハ當年より此意ハ公様を付しゆくも何れも世々
其てと申すもくママリ返上遅々仕ハ間先返上付ハ
極多仕立ハ其意ハ又ハ此借可被下ハ極多希貴
日本取土記今日返上仕立候とも是也付置多前よりさし掛り
難用を盡括し其ハ年々少シ此借是被下ハ極多何れも
此取同多ク本強候とも是也世々此のついでハ此取者

秋色最中 一冊 同伴 担任仕 難松 仕立 銀白

七〇〇号

曲亭先生

主は後山と曲亭中より我ハ此意ハ先の返来すべくも同
輩の付込ハ其意ハ得難し 一冊 曲亭のむづら一冊に五山と借取と一冊
ハ先の引立より作難しに付ハ一冊と申す也 此は是往後難松
手紙集めて一書と申すに申す也 此意ハあるとも曲亭ハ此意ハ
此意ハ 五山と難松の集巻に 復録と云々 此意ハ 三馬
ハ其意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ
付余月にて此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ
此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ
此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ
此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ此意ハ

三馬の傳の... 杉並に...
 三馬の傳の... 杉並に...

三馬とハ氷床相寄れがたに人に討て置くと云へり。...
 三馬の浮落を... 其根の...
 ... 我氏神ハ...
 ... 一九ハ...

のよ... 仁... 彼... 此... 三馬...
 ... 一九ハ...
 ... 我氏神ハ...

臣

予の自序 其の年を付たがごとく

と目かすに別に一様細曲の殊勝なり。曲幸も此人に別ありと
稱しすに中幸も作多の贈福なりしも程々の月下菊ツキノキ先にかし
ひまかしは自伝の安んずる主人に其善行を同じしに世評おとし
け下おれ春水の作に存はすとしかを同か「目録」と同く
といひて「飛田原」も「たつた」と云へがつかに中幸も作多の思ひ
しきりしと知やしが剛愎を曲幸も避けしなりしなり（目録を
はるお春水の評語あり）其をくそ彼地至降の一斑と云ふし。

カ六 五家の學問蔵書

予の自序の學問を知りて古代の多に事と付たが唐長江年迄代の
風俗考案と事として其意に達せしむ大見識と云ふし。學問と
てハ義と云ふべきなり。予の自序三年の學問と云ふは予の自序の

(廿三出)

謹愼しおれり。書學に志 漢學に識りしめて日本のみハ

たり學問なり。曲幸の始り醫師に於ては後ち小説家ありし
醫學本草醫しかしりし心に耕し筆に感る其のいとお漢
籍と海嶺しとさし 専門の學匠も此のうらまて博く學ぶるもこれに
傳言小説の其の初載稱しして價もつと長うも之獻はず他の
嗜樂也物ものも衣名の料も減じしと購ひもるも其の友人中
に珍書と稱する者なりは併りてこれを筆端にすはこれに藏書の
爲し五車にちり。予の自序 識見もさし高尚もそ習志ありつてハ
一季漢の正統ありと稱す。南北朝の事をかりもく書きつて其の
に勅王の志を存し。大義名分としりしに何事も業七カク國カクめ
んと是れめ同誌にハ藩も君平同好にハ渡り昔事なりと
一し一識見を著しせし。晩年なりと云ふを恐る元氣もさし阻又てや

深く東方位の子と云ふにありけり。けしの大義名も後
 の大水にてもいふに及ばず。出づるは獨翁偏周の樂をももつ。何
 小波多のよといはれり。未だ未だといひつゝし。一九の曲平の詩す
 らとてく。學をうして。見識をば自ら奪つて一杯の熱
 酔と誇死と世をやらば。三馬の自ら白竹をさぐ
 く。考へての意がのこる。何をも四文と鞍駁に五へて聞かぬ。是
 ちの取らんを我物類に情感を。徳心自叙を成すといふ。と云
 一宗旨あり。たれば何も侍し。しづて又静し。古作を全取にし
 て。我が息と他を掛は。筆端にばいんも。破りをはり。せり。ホ
 子不後書の上。後人のあたひ。行久の善夢と自ら録
 といひ。惟活世もつぎの考後。果はたひ。ひまれ。あふ長所あり。てあま
 の學問には。道にまゐり。特に深切なる人。山東空山が深し。つひ
 著作に

三草紙の水野修も。七緒より。ついで。翻譯にかりけり。玉山のハ
 行カテ。得のもの。とせし。ついで。告しの。是。と。いふ。自。叙。と。云。ふ。を。
 其。方。の。善。夢。の。説。也。と。い。は。れ。り。或。は。傳。説。の。説。也。と。い。は。れ。り。
 其。方。の。善。夢。の。説。也。と。い。は。れ。り。或。は。傳。説。の。説。也。と。い。は。れ。り。
 左。手。以。北。太。山。右。手。以。抱。嬰。孩。右。開。如。滿。月。箭。去。以。氣。身。
 傳。又。なる。の。か。ひ。太。山。と。の。す。は。り。に。か。め。あ。り。右。の。善。夢。の
 説。も。子。と。抱。く。さ。ち。に。い。は。れ。り。ひ。く。さ。ら。ひ。つ。づ。く。月。
 流。る。と。い。は。れ。り。矢。は。け。り。
 ま。ら。し。に。傳。へ。る。如。り。か。の。如。く。通。便。年。七。傳。ひ。の。原。書。と。他

原文 七十四轉 樂二面 (楊志北葉年武葉と行り月傳)
 左手以北太山。右手以抱嬰孩。右開如滿月。箭去以氣身。
 傳又なるの。かひ太山とのすはりに。かめあり。右の善夢の
 傳も。子と抱くさちにいひれり。ひくさらひつづく月
 流るるといはれり。矢はけり。
 まらしに傳へる如りか。の如く。通便年七傳ひの原書と他

人に語りて世に傳へたる物語は、いふ所の粗所、此人
の筆意、いとわびしく、昔ハ古仙傳と近松原村の陰、
の作と活丹に、此の意、いとわびしく、我が作に、
五七の筆意、いとわびしく。

才七 画工との関係

吾邦の表紙が先祖より傳へて來りたるものあり、
讀本も、繪入と先づ思ふ、此の事、
繪入の元、
三七、
曲平作の

我が本は、
いとわびしく、

この本は、
いとわびしく、
繪入の元、
三七、
曲平作の

いとわびしく

いながら桐着たるの國の翁を取かす作を別人が頼むに
 うにむねの約きまゝに相読のまじり水跡供しくは翁の考に
 あり。原本の所をそんと似せ入しては翁の考にむね
 一の翁の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 りねねの考にむねの考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 此翁の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 翁の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 あのもので世の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 斯の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 ながしむねをそんと似せ入しては翁の考に
 せかむねをそんと似せ入しては翁の考に

かハ 政令の關係

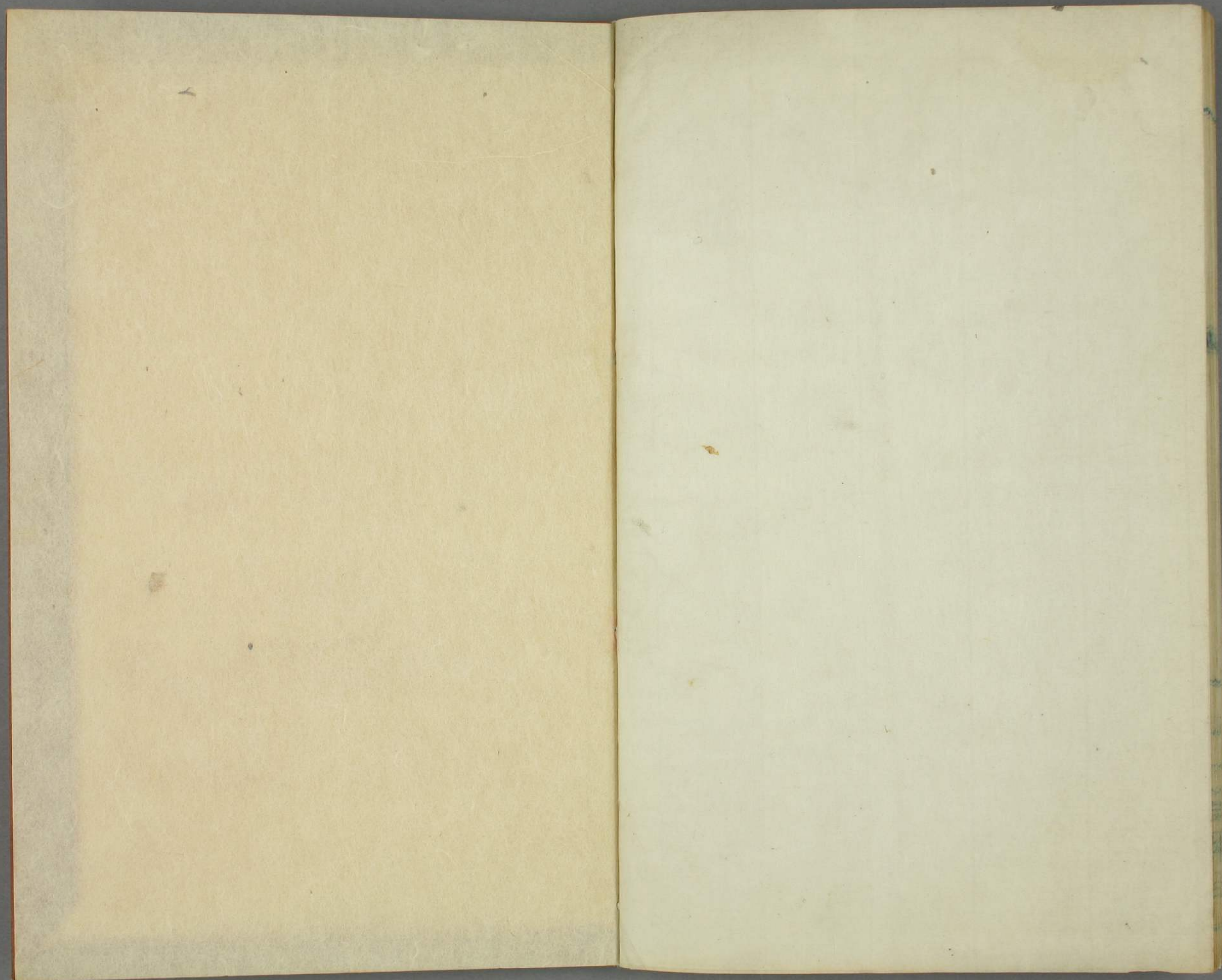
錦繪は名物とありて追々華美を極め、小説も趣向を新しくし權
 貴の言論に傾き、**戯文**の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 れりしを^{世の}畫政二年、^{世の}翁の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 重なる酒後存大も、はて利をせんとむねをそんと似せ入しては翁の考に
 ぶ^{世の}翁の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 い新考をそむに、**主考**の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 ちるに心動き仕掛文、^{世の}翁の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 一の教訓、^{世の}翁の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 畫屏の上思ひ、^{世の}翁の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 い^{世の}翁の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に
 小の考にむねをそんと似せ入しては翁の考に

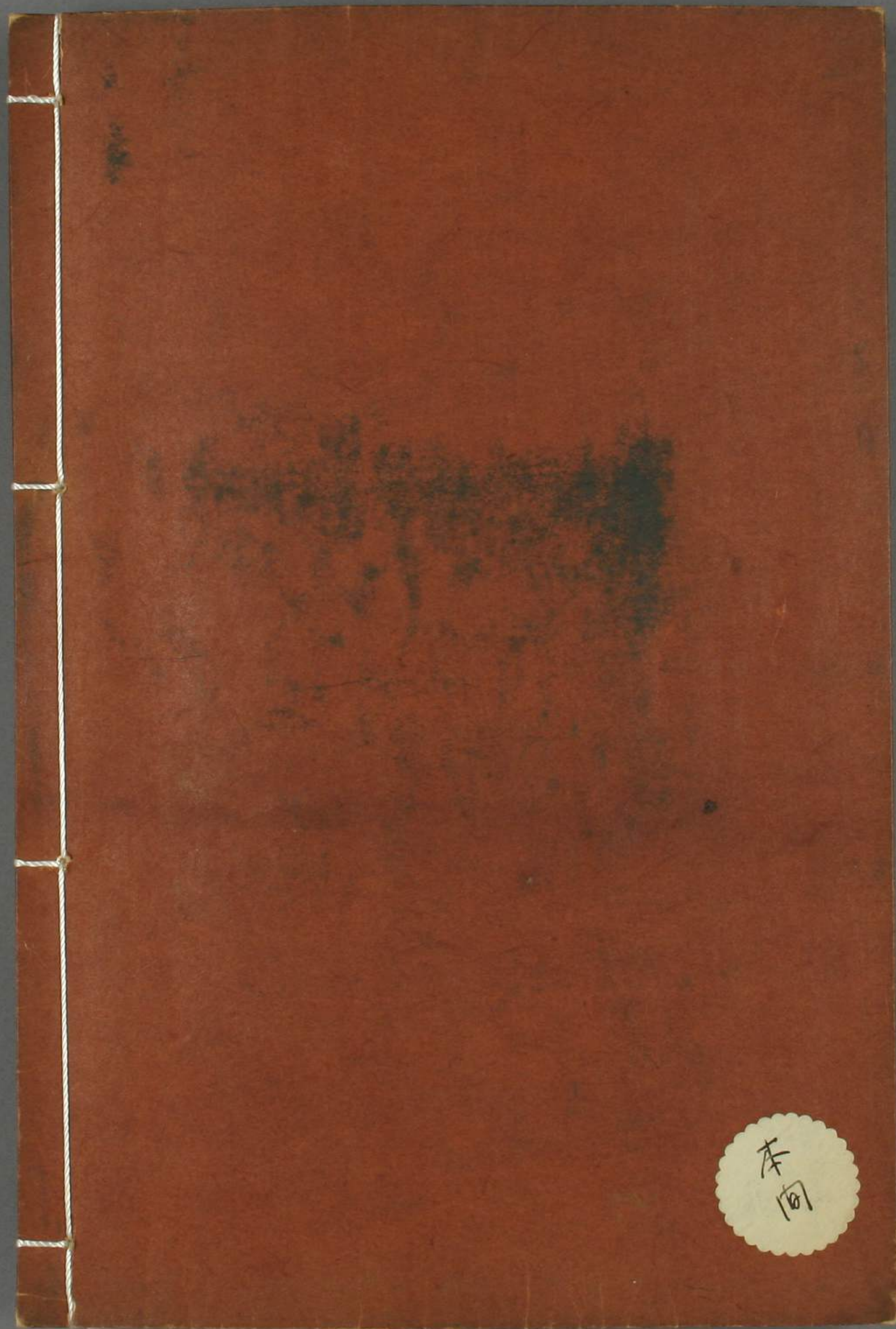
重さ新と神皇正統記の爲す...
 うく西原をせぬ...
 中津を...
 天保十三年...
 水揚懐...
 天保十三年七月...
 文政十一年戊子の日記八月二日...

の位は...
 畫時...
 三丁程...
 改名...
 因ハ...
 卷四...
 三丁程...
 近來...
 彼...
 其...
 其...
 其...

畫時...
 三丁程...
 改名...
 因ハ...
 卷四...
 三丁程...
 近來...
 彼...
 其...
 其...
 其...

此の曲字の情懐はうかしく、必し筆をなぐる振るやしやえ此天地を
 踏破り棄んと想ふれしを云く。らぶんに踏破一歩のこゝろ新の如
 し其後の煩悩を棄てて多き事ありしを云く。此に表面に
 水江家とけりありし法合をまがやくやと改得名をまがいのの感成後と
 弄ひし名を甚しむと多かりしあり。改得名をなしたるは、
 と奉水のこゝろれど内面のはづかし。此一偈よりして推し。





茶
圖